

パプアニューギニアで出会った食文化

岡 村 徹

帝塚山学院大学 リベラルアーツ学部 教授

○司会 では、定刻の2時になりましたので、講座を進めさせていただきます。

先週に引き続きまして、国際理解公開講座の第2回目をご来場いただきまして、どうもありがとうございます。本日は、本学のリベラルアーツ学部教授の岡村先生のほうに「パプアニューギニアで出会った食文化」ということでお話させていただきます。

では、まず最初に、所長の清田より岡村先生の紹介を行わせていただきます。

○清田 皆さん、こんにちは。

先週以上にきょうは本当にうだるような暑さですけれども、先週よりもっと多くの方に駆けつけていただいたように思います。ありがとうございます。

型どおりですけれども、岡村先生のご紹介をさせていただきます。岡村先生はこの公開講座、以前に一度やはり出演していただいたことがあります。1999年ですから今から14年前ですけども、ご記憶のある方もいらっしゃるかと思います。当時のテーマが「オセアニアの言語と社会、アジア系労働者の言語生活」でした。今回は、ぐっと砕けて「パプアニューギニアで出会った食文化」ということです。

簡単に、ご承知かと思いますが、岡村先生のプロフィールをご紹介いたしますと、九州大学の大学院で比較社会文化の博士号をとっていらっしゃいます。ご専攻はパプアニューギニアとかあの地域の言語学、言語社会学ということでしょうか。言語学というのは非常に緻密な学問で、私たち雑駁な人間にはなかなか近寄りがたいところがあるんですけども、後で顔を拝見していただければ、いかにも親しみの湧く先生でして、きょうはたつぷりとパプアニューギニアの世界につかっていたきたいと思います。

私ももう66なんですけども、私たちのシニア世代は最近、タイとかマレーシアとか、リタイア後のシニアライフというのを海外で送ろうというのがはやってるんだそうですが、さすがに、先ほど岡村先生にお伺いしたパプアニューギニアはちょっと、リタイア後の生活先としてはというふうに首をひねっていらっしゃいました。ただし、お伺いすると、パプアニューギニアの高地にお住まいの方たちは大家族で、非常に一人一人のきずなを大事にする、私たちが忘れてしまったような心のふるさとというふうなところのようです。私も楽しみに拝聴したいと思いますので、よろしく願いいたします。

○司会 じゃ、岡村先生、よろしく願いします。

○岡村 皆さん、こんにちは。岡村です。

本日はお暑い中、こんなにたくさんの方にお越しいただきまして大変うれしく思っております。本日は2時間ほどですけれども、どうぞよろしくお願いいたします。

私は、帝塚山学院大学の狭山キャンパスで、今もちょっと紹介していただいたんですけれども、言語学を担当しております。ふだん学外で講演する機会というのは、ほかの教員と比べますと余り多くはありません。この公開講座は2度目になります。そんな数少ない講演機会の中でも大変印象に残ってることが一つございまして、今から5年ほど前だったかと思うんですけれども、あるカルチャーセンターで6回分の講座を担当することになっていました。そのときのタイトルが、「パプアニューギニアの文化的世界」ということで講座を担当する予定になっていたんですね。ところがその受講希望者が、ふたをあけてみると1人だったんです。それで私、ちょっと残念だなと思ってたんです。ところが、それから5カ月ぐらいたってからだと思うんですけれども、ある大阪市内にお住まいの男性からお電話を大学に直接いただきまして、ちょっと私に会いたいと言うんですね。その翌日、その方が私の研究室に來られまして、何と85歳の大阪市内にお住まいの男性で、戦時中、自分はニューギニアに水木しげると一緒にラバウルにいたということでした。その時、会話をしながら気がついたんですけれども、その受講希望者1名というのがその方だったんですよ。きょうひょっとしたら、いらっしゃってたらもう大変うれしいなと思って楽しみにして来たんですけれども、恐らく今90を超えるぐらいかなというふうには思います。そういうことが過去にございました。

私の研究室には、ちょうどパプアニューギニアの全国地図がありまして、その地図を見つけるとその方はずえをつきながらその地図のほうに向かっていかれて、自分は戦時中、水木と一緒にここにいたと。この山を越えて、途中、現地住民から食料を分けてもらいながら何とか日本に帰還することができたんだということで、3時間お話ししてくださいました。私は大変貴重なお話を伺えたなと思いました。

同時に、2つのことを考えさせられました。一つは、戦後、私たちの世代は、戦争を体験なさった方々のお話を適切な時期に、そして適切な場所でもってちゃんと耳を傾ける機会といますか、謙虚に話を伺う機会を持ってきたかどうかという、そういった素朴な疑問を持ちました。

それからもう一つは、この男性によりますと、現地住民に食料を分けてもらったのは自分が少し現地の言葉、ピジンと呼ばれる言葉を話せたからだ、とおっしゃるんですね。パプアニューギニアというのは実は多言語社会でして、700を超える言語が話されています。その中で、同じパプアニューギニア人同士であっても、自分自身を語るのに在来の言葉だけでもって自分自身を語ることはできないんです。みんな言葉が違いますから、隣の村に行ったら全然言葉が違います。そんな中で、このピジンと呼ばれる共通語が果たす役割、これは非常に重要なんです。これは同胞が話す言葉、仲間が話す言葉として大変重宝されていまして、就職や進学の際にもこの言語は欠かすことはできません。この男性は、戦時中ピジンを少し習得して、それを村びとに使う

ことによって食料を分けてもらったのです。これは今でもそうなのですが、ピジンでニューギニアの人に語りかけると、向こうの人はものすごく表情が柔和になります。とても喜んでくれます。ですから私もよくわかるんです。仲間と思ってもらえたんじゃないかと思うんですね。

ただ、その後私自身もいろいろ調べる機会がありまして、一方でこういう報告もあるんです。ある人類学者の報告なんですけれども、いつも食料を要求してくる日本人、日本兵が上官クラスの決まった人たちばかりだったので、末端の兵士といいますか、哀れでかわいそうに見えたと。だから食料をこそっと与えたんだという報告をある人類学者は論文の中でしています。また、別の村での報告では、旧日本軍があるとき突然村にやってきて食料を強奪していったと、そういった話も残っていて、これはもう単純に一般化することはできないなと考えました。

ですから、この3時間というのは、私、途中、その男性の方にニューギニアの、きょうは後ほどパワーポイントで資料をごらんいただきますけれども、ゴロカコーヒーという高地で有名なコーヒーがあるんですが、そのコーヒーをどうぞということでお勧めしたんですけれども、その方はもう話に夢中でしてね。もう3時間ひっきりなしで、私は途中、言葉を挟むんですけども、自分の世界に入っちゃって会話にならなかったという記憶があります。私は大正11年生まれの父親を自分が19のときに亡くしてるんですけど、自分が小学生のときに父親がよくお酒を飲みながら満州の話をしてたんですね。私は小学校のときですから、また始まったと思って余り聞いてなかったんです。そのことを今大変反省してまして、あのとき話をしっかり聞いておけばよかったなど、いつも思います。そういうこともあって、いろいろ考えさせられたという次第です。

お手元に資料が3種類ございます。一つはパプアニューギニアの地図が左側に載っている、これが一つと、それから写真がいっぱい載っている資料、それが2つ目。もう一つは、「フィマ村を訪ねて」というエッセーがございます。全部で3種類ありますが、皆さん全員ありますか。

それでは、まず「パプアニューギニアで出会った食文化」というA3のプリントをごらんください。

本日は、2ページの上のほうに「はじめに」というところがございますけれども、2年前に私が訪れましたニューギニア高地のフィマと呼ばれる村の人たちの食生活、これをご紹介させていただきたいと思います。それからもう一つ、先ほども申し上げましたピジンと呼ばれる言葉の食に関する語彙と、そして表現をご紹介させていただきたいと思っております。

フィマ村の概要なんですけれども、左側に地図がございます。パプアニューギニアは、東京の成田からニューギニア航空でもって直行便が出ておりまして、片道6時間25分で着きます。成田を夜に立ちまして、ニューギニアの首都ポートモレスビーには早朝に到着します。地図にポートモレスビーというところがございますが、そこからさらに飛行機で1時間ほど飛んだところにゴロカという都市がございます。きょうはこのゴロカからバスで1時間ほど行ったところにフィマという村があるんですけど、その村の話が中心になります。

パプアニューギニアというと、ふだん余り情報が入ってこないところなんですけれども、私た

ちが真っ先に思い出すのは、1940年代の日本人とパプアニューギニア人との接触ですね。約30万人の日本兵がニューギニアに行きまして、そのうち約18万人の方が飢えとマラリアで命を落としたということが、よく日本人に記憶されていると思います。それから、余りよく知られていないこととしまして、19世紀の後半から20世紀の前半にかけてですけれども、大体100人くらいの規模の日本人コミュニティがこのニューギニアにありました。何と、神戸に南洋産業会社といたしまして、小嶺磯吉さんという方が中心だったんですけれども、ニューギニアから真珠貝とか高瀬貝、それからコブラ、こういったものを輸入していたらしいんですね。そして、日本からは造船に必要な資材を向こうに送っていたようなんです。

そのときコミュニティをつくっていた日本人は、九州出身者、特に熊本県、それから長崎県出身の方が約6割を占めていまして、そして和歌山県出身者がつづきます。和歌山の方は潜るのが上手なんです。わざわざオーストラリアからスカウトが来るくらい大変ダイバーとしては天才的な方が多かったんです。主として海洋関係のお仕事に従事していた船大工さんとか、そういう関係の方々が多くいらっしゃったそうです。

小嶺磯吉さんは、現地住民やドイツ植民行政府の方々、さらにはオーストラリア人や中国人とも非常に良好な関係を当時つくっていたそうです。その証拠に、小嶺磯吉さんの葬儀は盛大に行われたという報告がごさいます。パプアニューギニアは、結構日本人とのつながりがある地域です。

今は日本政府の関係者、大使館の関係者であったりとか、あるいはNGOの関係者、それから人類学の研究者、また、短期の滞在の方でいえば20代の男女、海がきれいなものですからちょっと潜りに行くんですね。そういう方々が結構いらっしゃいます。あと戦友会の方々が飛行機をチャーターして、昔は関空からもちゃんと飛んでましたよね。向こうでお会いしたこともありますけれども、そういうことで、日本との関係といいますかつながりといいますか、結構多岐にわたってるかと思っています。

それから1990年代以降、戦争体験集が数多く出版されるようになりました。また、オーストラリアとかアメリカ人の視点から見た、特に退役軍人の方が中心となってあらわされた本とかたくさんあるんですけれども、現地住民の視点から書かれた本というのは余りないんですね。その点は反省すべきじゃないかなというふうに思っています。

フィマ村の人口は大体400人ぐらいです。職業は何ですかと聞きますと、皆さん農業と答えます。主食はサツマイモ、タロイモ、ヤマイモです。家畜として犬、豚、鶏を飼っています。ヤギもいます。それから、言語は在来の言語でヤガリア語と呼ばれる言葉、それから今さっき申し上げましたピジンと呼ばれる言葉、これが部族間の共通語になっています。そして、約20%の人が英語を話します。残りの80%の方は英語を話しません。

男性と女性の仕事は、はっきりと決まっています。男性はヤマイモの収穫とか木を伐採して家をつくったり、それから豚よけのフェンス、柵づくりをしたり、石蒸し料理、これはムームーというんですけど、この準備は男たちがします。力が要るんですね。

それから、女性の仕事としましては、畑仕事のほか子育て、掃除、洗濯、炊事、それから店番です。バナナとかピーナッツを売っています。子供もちゃんと仕事がございます、沢の水をくんできます。これは大変重要な仕事です。

経済としましては、収穫したイモ類、それから果物、コーヒー豆、これはパプアニューギニアの経済を支える4つのCと呼ばれていまして、1つはコーヒー（coffee）のCです。そして2つ目が、石けんやマーガリンの材料になるんですが、Cで始まるコプラ（copra）、それから、カカオ（cocoa）ですね、これが3つ目。チョコレートをつくる時に使います。それから銅（copper）。金、銀、銅がたくさんあります。特に銅に関しましてはニューギニアの経済を支えています。金曜日の市場では、現金で衣服や食料品を購入します。それから教育費にも充てますし、ちょっとお金がたまったら中古車を買ったりもします。

それから観光収入、これが最近注目を浴びているところなんですけど、パワーポイントの資料をご覧ください。これは、冒頭でお話したフィマと呼ばれる村ではございません。別の村に私が1人で、観光客としてこの村を訪れたときの写真です。同じ高地ゴロカの村です。彼らへの日本人の一般のイメージとしましては、上半身が裸で腰みのをして、そして目がくりくりとして、身体能力が高い、そういったイメージをお持ちの方が多いです。ですが、ちょっと奥の家のほうをごらんいただきますと、服を着ている村びとがいるのがおわかりでしょうか。この前列にいらっしゃる方々は、子供さんもいますけれども、旅行社からこの村に電話が入ります。今から観光客がそっちに向かうぞという連絡が入るんです。すると、この前列にいらっしゃる方々は急いで裸になります。伝統的な衣装に着がえるのです。

観光客はオーストラリア人、ドイツ人、ロシア人です。日本人はあまりいません。彼らは、日本人も含めてですが、本物を求めて村に行きたいと思っているわけです。そのためには現地の方は裸でなければいけないという意識があるんです。本物は少なくとも、こちらの服を着ていらっしゃるようなこういう方々なんです。伝統的な通過儀礼の際にはこういった裸の格好をします。確かに観光客は本物の文化を求めてやってくるんですけれども、これが決して本物ではないということがわかっている、観光客はこういう姿を見て満足して帰っていきます。ですから、言ってみればコピー文化とでもいいましょうか、にせものの文化というものを観光客は見て、そして満足して帰っていくのです。村びとは村びとで、観光客が来ることによって現金収入が得られます。もともと貨幣経済が浸透していなかったところではありますが、そこに現金収入が入るようになったわけですから、彼らにとってもメリットがあるわけです。

観光収入だけで結構村が潤っているようなところもありまして、村びとにとっては重要です。

ところで、日本人は現地の村びとから、ホワイトマンと呼ばれるんですが、ちょっと居心地が悪くありませんか。皆さんもここに行ったらホワイトマンと呼ばれます。もともと彼らはオーストラリア人やアメリカ人のことをマスターとかホワイトマンと呼んでいたんですけども、日本人もホワイトマンと呼ばれるんです。なぜかといいますと、ここアジア・太平洋地域の中でアメ

リカ軍と戦ったのは日本だけだと、日本人は非常に勇敢で、財力もあり、強いと考えるのです。この強いという概念が判断の基準になっているようなんですね。実際私は、フィマ村に滞在中、二、三回ホワイトマンと呼ばれました。

次の写真に入ります。観光客ですから、決して私は、やりで襲われてはおりません。こういうふうと一緒に皆さんと写真を撮るんですね。これ、ごらんいただいて皆さんお気づきになったと思いますけれども、割とお腹が出てるのは私だけなんです。村びとの中で生活習慣病になってらっしゃる方はいないです。都会で暮らす人の中には、糖尿病で入院している人がいます。

身長はそんなに高くないですね。だけれどもがっちりしています。皮膚の色は茶系ですね。同じニューギニアでも、ここは高地なんですけれども、沿岸部、海沿いのほうに行きますと結構身長が高く、肌の色ももっと黒い方がいらっしゃいます。身体特徴一つとっても雑多な様相を示しているというわけですね。

次の写真にまいります。たった一人の観光客のためにこうやって伝統的な歌を歌いながら演奏もして下さるんです。左側の方は頭にいろいろ、鳥の毛とか使っていますね。豚の骨も牙も使ったりするんですけども、貝とか、あと、グラススカート（草のスカート）ですね。そして、現地の言葉でシンシン（singsing）というんですけど、1年に1回、高地のマウントハーゲンと呼ばれるところでショーがあります。俺のところのダンスが一番だ、いや私のところが一番だということ踊りの美しさやダイナミックスさを競い合う、そういう国内大会があるんです。ですから、彼らは非常に一生懸命やります。

この3人の女性はゴロカ大学の学生さんです。この大学は教員養成系の大学なんです。ですから将来、小学校とか中高の教員になるという、生徒さんが学んでいます。パプアニューギニアには大学が、全部で6つあります。一つは医学部とか法学部のあるパプアニューギニア大学、そして看護学とか健康科学が勉強できるパシフィック・アドベンティスト大学というのがあります。そして、高地に教員養成系のゴロカ大学、そしてマダンと呼ばれるところに、商学を勉強できるデイバイン・ワード大学というのがあります。それから、ラエと呼ばれる都市にはパプアニューギニア工科大学というところがありまして、鉱山学部があります。あと農業の勉強ができる大学がラバウルに1つあります。全部で6つあって、そのうちの一つがゴロカ大学です。後ろにリュックサックなんかしょってますね。この辺を見ますともう日本の大学生と変わらないです。

これは、ビームと呼ばれるバッグです。きょう持ってきたんですけど、こういうものです。大学生であれば、ここに教科書を入れます。農作業をしているご婦人でしたら、ここにサツマイモとかタロイモとかヤマイモを入れます。そして何と、これ万能でして、赤ちゃんをこの中に入れて、それで枝のところにつるしておくんです。そして風が吹くと揺りかごようになるんです。この中に子豚も入れたりします。しかもこれ、丈夫なんですよ。材質は、竹でできていたり、あるいはバナナの葉っぱでつくったり、部族によって模様も違うんですよ。ですから、その模様とか材質を見ただけで、ああ、あの人は沿岸部から来た部族だとすぐわかるんですね。ガールフレ

ンドがよくボーイフレンドにこのバッグを暇さえあれば、つくっています。伝統的には豚の骨を使ってつくります。最近では、壊れた傘の柄の部分がありますね。あれを使って器用につくっています。壊れた傘を彼らは絶対に修理しませんので、ごみになるだけで、よくないとずっと思っていたんですが、ビルクというバッグをつくるのに生かされていると聞いてまだ救いがあると思っています。

あと、お母さんが息子さんとかお嬢さんにつくっていますね、もちろんご主人にも。ですからニューギニアでは、よくその辺で売っていますし、またよくいただけます。向こうに行くたびに、私ももらいます。

こちらは男子学生ですね。こっちが女子学生ですけども、ごく普通の格好をしています。こちらは私の友人なのですが、ゴロカ大学で言語学を教えています。

これは、学内にある売店です。ここに行きますと、缶コーラとかファンタとか、それからポテトチップスとか、ちょっとした日用品が手に入ります。

これは、日本政府の援助で建てられた図書館です。この中へ入りますと、もう日本の大学と変わらないといいますか、時々携帯電話の音が鳴るんですよ。その辺の公共図書館も変わらないかもしれませんけれども、そして、あとニューギニア人がパソコンでフェイスブックとかやってるんです。皆さんがニューギニア人に対して抱くイメージと大きく異なると思います。

ここからが、私が2年前にお世話になったフィマと呼ばれる村の写真になります。

これは、私が今回調査をするのに借りた小屋です。円形的小屋もあります。ここにポールみたいなのが1つ立ってますね。これは、嫁さんが1人ですよという意味です。これがもし2本立っていたら嫁さんが2人ですよと、3本は3人ですよと、男たちは嫁さんの数で自慢し合います。そういう一夫多妻制という制度がまだ残っているところなんです。

彼が、フィゴ君といまして、今回私の世話をしてくださった村の方です。まだ二十をちょっと超えたぐらいの若い男性です。皆さんごらんいただいて気がついたと思いますが、立派な道具を使っていますよね。今日ではナイフを使って果物の皮をむきますが、伝統的には竹のナイフを使っていました。昔、ドイツ人がニューギニアに来たときに、ドイツ植民行政府はニューギニア人をコプラ農園で何とか働かせたいと思ったんです。でも、ドイツ人の目からはニューギニア人が余り仕事をしない人たちだと映ったらしいんです。そこで、一生懸命働いたらナイフを上げるよと言ったんですね。するとニューギニア人が一生懸命になって働いて、そしてようやくナイフを手に入れたんですね。でも再び働かなくなったという、そういう話が残ってますけれども、今ではもう普通にどこの村でもナイフは1つや2つはあります。

こちらは村で獲れる、野菜とか果物です。そして、これはポーポーだと思っんですけど、こういったものがたくさんあります。こちらは移動中に会ったフィマ村の人たちです。髪の毛が結構ちりちりの人が多いですね。これはフィマ村のところにあります小学校を訪れたときの写真ですが、ゴトミ小学校というんですけれども、奥のほうに校舎がありまして、教室の中にはパソコ

ンがあります。こんな高地にもパソコンがあるんだなと思いました。どこへ行っても子供たちの表情はいいですね。

こちらは村の結構ハイカラなおじいちゃんたちです。これは、決して私が来るからということでは急いで着がえたわけじゃないんです。もうごく普通の日常、ありふれた一こまなんです。

ニューギニア人の平均寿命は大体55歳なんです。まだいいほうなんです。結構戦時中苦労なさった方が長生きします。若い方で今、都心部を中心に糖尿が増えてきています。オセアニア地域で一番糖尿病患者が多いのがナウル共和国という小さな島です。ここは世界一です。私が行くと、何でおまえそんなに痩せてるんだと言われますからね。びっくりすると思いますけれども、もっと食べと言われます。オーストラリア人やニュージーランド人が食べないような脂身の多いラム肉を食べるんです。彼らは好きなんです。井にして食べるんですよ。食べては寝て、食べては寝てしてる。昼休みは11時から午後の2時まで3時間。ですからもう寝てばかりなんです。したがってとにかく太るのですけれども、ナウルは平均寿命が50ぐらいですね。あと一つ、サモアも糖尿病患者が多いです。一方、ニューギニアの村のほうは、ほとんど生活習慣病の方はいらっしやらないです。

こちらは20代の若者です。先ほどの老人が映ってますけれども、その手前に犬がいます。この犬が本当に大変だったんですけれども、トイレが外にありまして、小屋から外に出てトイレに行くたびにこの犬がほえるんです。ちょっと苦労しました。

ニューギニアの神話を読みますと、昔、犬は人間の女性と結婚していたとか、あるいは犬の地位が人間より昔は高かったという、そういうお話が結構残ってるんです。実際、ドッグストーンと呼ばれる村がありまして、犬の岩と書いてドッグストーンですね。そこは実は容易には近づけませんので、もうほとんどニューギニア人でも行く人がいない村なんです。女の人だけでもって村をつくっているんです。その村にいる犬は雄ばかりです。人間は女の人ばかりなんです。これは非科学的な話ですけども、そこの村の女性は背中のところには犬のひっかき傷があるんです。おわかりかと思いますが、雄犬と人間の女とが性交渉を持ち、男の子が産まれたら殺すそうです。女の子が産まれたら育てるそうです。という形で、ニューギニアは3万年の伝統があるんですけれども、その3万年の期間の間にやっぱりそういう女だけの村をつくったというのは、全くあり得ない話ではないと思うんですね。ただ、やっぱり男の人がいないということで社会が成熟するはずがないですから、時々、村に男の人を招き入れていたのかなと想像するのです。

おもしろい話もありまして、その村に行ってそこに生えている植物だとかを少しでも持って帰ったら、今自分が抱えてる病気が治るというんですよ。ところが、村人と、あるいは犬と視線が合ったら殺されるというんです。だから、もう一か八かの大勝負ですけども、もう死ぬとわかっていたら行くかもしれません。余命3カ月とか言われたら冒険を冒してその村に行こうかなと思ったりもします。とにかく、犬に関しましては結構おもしろい話がたくさん残っています。現在ニューギニアにいる犬はもともと東南アジアのパリーア犬を祖とすると言われてまして、ニュー

ギニアとアジア大陸とが陸続きだったところに犬、豚、鶏を連れて民族が移動してきたと言われて
います。

これは野豚ですね。これがまた大きいんです。村びとは、野豚を捕まえることができなければ
一人前の男として認めてもらえません。要するに、大人になるためには野豚を捕まえないといけ
ない。豚は非常に地位が高くて、先ほど犬を紹介しましたけれども、豚が何といても一番地位
が高いです。豚肉はふだんめったに食べません。隣の村から大事なお客さんが来たときは、豚を
解体して、先ほど言いました石蒸し料理の中に肉の塊を放り込むんですが、結婚式だとか葬式だ
とか特別なときに豚肉を食べます。

豚は結納金の代わりにもなります。ニューギニアの村びとは現金収入をそれほど多く持ち合わ
せているわけではありませんので、結婚すると女の方のほうに成熟した豚を5頭、これを一緒に
持っていくほど、大変価値の高いものです。先ほども言いましたように、子豚はビルムというバ
ッグの中に入れて家畜として飼いますし、人間の排せつ物も処理してくれるほどきれい好きです。
昼間はこういうふうにし飼いにしまして、夕方になると豚小屋に戻ってきます。

先ほど、犬が映ってましたが、犬と豚が一つの村にいるわけです。もし犬が豚にちょっかいを
かけるとします。そうしたらその犬は耳を切られるらしいんですね。実際に耳を切られていた犬
がいましたけれども、もう一回悪さしたらどうするのかと聞いたんですね。そしたら、もう片方
の耳を切ると言いました。その次はどうするんだと聞いたら殺すと言ってましたね。ですから、
ニューギニアの村、どの村でもそうですが、豚の地位が圧倒的に高いんです。

これは、柑橘系の果物の木に村びとが登っている写真で、グレープフルーツのようなものです。
朝いっぱいいただきました。

これはお昼御飯の準備をしている村びとですが、サツマイモとかヤムイモとかタロイモの皮を
むいてるんですけども、サツマイモだけで何種類もあるんです。その種類に応じて個別具体的
に単語が一つずつあるんです。ですから、農耕文化といいますか、奥が深いなというふうに思い
ます。ふだんは、鍋にむいたお芋さんを放り込んでちょっと煮るんですね。それで、はいでき上
がりということで、塩もかけません。もう素材そのものの味を楽しむようなところがあって、私
なんかいろいろ味をつけるほうなんです、彼らの食生活はやっぱりいいなと思いました。

それから、これは子供が朝御飯を食べているところです。こちらが台所です。

これが先ほど言いましたトイレなんです。ぼっとな式のトイレなんですけれども、トイレト
ペーパーはどうするかというと、葉っぱがありますよね。これを一々拾い集めて中に入らないと
いけないんです。私、もう毎回この葉っぱを、ずっと集めていたような記憶があります。この葉
っぱは、少し手でもみますと適度な水分を含んでいるので、ちょうどトイレトペーパーのかわ
りになるんです。お芋さんばかり食べてますからとてもお通じもよかったんです。実は日本に
帰国してからも、こういう葉っぱを見ると気になって気になってしょうがないんです。つい、立
ちどまって葉っぱを凝視してしまうんです。この葉っぱは使えるとか使えないとかね。でも皆さ

ん、これは分解されますので環境にはいいです。

お風呂は、ここから歩いて40分ほど行ったところに川がありましてね、それがもう川の水が冷たいんですよ。男性が利用する川と女性が利用する川の両方があります。みんな石けんとかシャンプーを使わないのです。川の中へ入りますとひんやりしていて、片道40分、帰りも40分かけて歩いて帰ってくるんですけども、その間汗まみれになるかなと思ったら、もう体がずっとひんやりしたままで気持ちがいいんです。

ここにバナナがありますよね。きょうは食に関する話をしないといけないので、このバナナなんですけど、バナナは後ほどご紹介します石蒸し料理の中に放り込んで蒸すんです。そして、その辺で売ってます。女性がお店でこういうバナナを売っています。なかなか、小さいですけども甘くておいしいです。

またニューギニアの神話の話になりますが、動物の死骸を埋めたところから、あるいは人間の遺体を埋めたところから、こういったバナナとかサトウキビだとかココヤシといった有用植物が生えてくるという神話がありまして、それを死体化生型神話と呼んでるんですけども、要するに人間というのはこういった自然界と連続した存在であると、一体化しているということをあらわしていると思うんです。また、人間があるときバナナに変身したり、バナナからココヤシに変身したり、ココヤシから今度はヘビに変身したり、ヘビから星にかわったりという変身神話が結構あるんですね。これは、変身というのは人間の潜在的な願望をあらわしていると思うんですが、やはりそこでも人間と有用植物と自然界とが一体化して、連続した存在であるということをやっぱり意味してるんじゃないかなというふうに思います。

バナナの葉っぱというのは雨よけになるんです。ですから、今でもそうですが、雨が降ってくるとバナナの葉っぱを使って雨よけをします。これがムームー料理には欠かせないんです。これでもっていろんな野菜とか果物をくるむんです。

そして、これは隣の村に移動してる途中に見つけたんですが皆さん何だと思いませんか。ちょっと見にくいんですが、コーヒー豆です。それを天日干ししているところです。これを干して市場に持っていくんですね。そうすると現金収入が得られるわけです。コーヒーはなかなか香りがいいです。そして、このまち全体にコーヒーの香りが漂っています。これは、自分のところの村でこうやってコーヒー豆を煎ます。これはコーヒー工場です。コーヒーバッグをつくってますね。ブルーマウンテンです。ここは、現地の人々の雇用に非常に貢献しています。

こちらはトランプをしている村びとの様子です。私は、言葉の資料を収集しに来たんですが、その調査に協力してくれた人には、ボールペンやノートなどを手渡します。一番喜ばれたのがトランプです。ですから毎回トランプをたくさんコーナンで仕入れて、持っていきます。

そしてこれは、ブアイという嗜好品です。

ちょっとごらんいただいたらわかりますが、あまり、バナナを買っていかんとか声かけしてくだらないんですね。大阪人から見たらこいつ商売する気あるのかなと思いたくなるような状

況があります。多分、誰もが知り合いですから、声掛けをする必要がないんでしょう。だからちょっとした情報はもう何でも共有できる、そういう村なんですね。ですから、いわゆる高コンテンツ文化に分類されるわけです。

これがブアイです。1個、日本円で10円もしないような嗜好品なんですけれども、これを4つにカットしまして、キンマと呼ばれる葉っぱにくるんで石灰粉をまぶして、口の中に入れてくしゃくしゃするんですよ。そうしましたら爽快な気分になるんですね。インタビューしますと、大学生でも1日に7回か8回はかむとこたえてくれます。かむと爽快な気分になります。嗜好品なんですけれども、口腔ガンを引き起こすリスクがあるんですね。あと、環境問題、衛生的にもよくないのは、かむと口の中が唾液と反応して真っ赤になるんですよ。それを路上にみんなぺっぺっと吐くんです。それがちょっと汚ないんです。ニューギニアに行くところでも路上でこれを売っています。

こちらがピーナッツです。一つ一つバッグに入れてまして、これがなかなかおいしいです。少し塩分をきかせていたと思います。一回私、別の市場でココナッツジュース飲んでたんですね。すると何かしら、視線を感じたので後ろのほうを振り返ったら、みんな私のほうを見てるんです。こんなところにホワイトマンが来るのは珍しいというふうに思ったんだろうと思います。

これが、フィマ村の台所です。ちょっとした釜が奥のほうにありまして、その上に網があります。これは切株です。そして、切株でつくった椅子です。これがベンチです。こちらは鶏小屋になっています。たくさんの鶏がいます。ここでいろいろ煮たり焼いたりするんですけれども、煙が出て心配ありません。結構すき間があって、こういうところから煙が抜けていくんですね。天井のほうも隙間があります。だから煙で鶏たちが窒息することはありません。

とにかく、網の上でいろいろ鍋を置いてぐつぐつ煮たりするんですけれども、1週間の間とにかくお肉と呼べるものを全然食べさせてもらえませんでした。1週間の滞在の間に1回ぐらいは鶏肉を食べさせてくれるだろうと思ってたんですけど、結局一度もそのような恩恵にあずかることはできませんでした。卵も食卓にでませんでした。あるとき、村を離れる3日ぐらい前ですけど、何かちょっと毛をむしられたちっこいスズメぐらいの大きさの鳥がこの網の上に乗ってたんです。これどうしたんだと聞くと、いやさっき空から落ちてきたと言うんです。それをちょっとむしって今この上に乗っている。私はそのスズメサイズの鳥の足の部分の肉をもらいました。お肉ってこんなにおいしかったんだなと思いました。

塩分は、多分日本人は1日10グラムから11グラムくらい摂取していますが、この村の人はもう5グラムもとっていないと思います。ですから私なんかは体が塩分を欲してくるんですね。先ほどの売店に行ってポテトチップスを思わず買ってしまいました。

これは鶏小屋の鶏です。朝、外に出して放し飼いにしていますが、夕方になると戻ってきます。夜になると鶏小屋の上のほうで寝ています。

これが、皆さんにご紹介したかったムームーと呼ばれる料理です。石蒸し料理なんです。最初

ここに穴を掘ります。その穴を掘ったところに焼き石を並べまして、そしてその上にバナナの葉っぱを乗せて、さらに皆さんに今、回して見ていただいているバッグの中に野菜や果物を入れて重ね、さらにそこからまたバナナの葉っぱを乗せて、その上から土をかぶせてスコップでぺたぺたと肉づけをします。そして最後、この真ん中、中央部分に水を注いで、ここから蒸気がふわーっと上がるんですね。約1時間ぐらい待つとでき上がりです。

ムームー料理の長所は、やっぱり20人、30人という単位で食事をとることができるという、そういう長所があると思うんです。仲間であることを確認する、そういう行為でもあるように思います。欠点は時間がかかるということですね。とにかく、準備から食事にありつけるまでに2時間ぐらいかけるんです。ですが1週間に1回か2回はこの料理をしています。

私なんか職場でどうかすると昼ごはんを5分ぐらいで済ませてしまうことがあって、やっぱりニューギニア方式の食事をしないといけないと反省をしました。村びとはムームー料理をとおして仲間であることを確認し合う。みんなそれぞれ役割があるのがいいと思います。私は水をくんでくる、俺はムームー料理の準備をする、そういった形でフィマ村の村びととしてのアイデンティティーを確認するということがあります。その一方で、この村でもそうですが、一種の緊張関係もはらんでまして、何か悪さをするとするでしょう。一夫多妻制ですからちょっとよからぬこともあるわけですよ。そうすると村を追い出されます。村を追い出された人たちはどうするかというと、追い出された者同士で一つの村をつくるんです。

これはカボチャを入れようとしているところです。バナナの葉っぱを使って煮崩れを起こさないようにしています。男たちは必死です。

これは、さっき皆さんに回して見てもらったバッグの中に、沖縄のヤーコンによく似た、現地ではアスピンと呼んでましたけれども、それをいっぱい詰めて、そしてムームーの中に入れていくところです。これは、いっぱいくれました。食べると言われてこればかりくれるものですから、もういいかげんいいよと言いたかったんです。これらは皆何もつけないで食べます。とてもほくほくしておいしかったです。あとカボチャ、バナナ、サツマイモ、タロイモ、ヤムイモ、それからキャッサバもあります。ちょっと鶏肉とか豚肉を入れてくれたら本当によかったんですけどね。そしたら彼らはこう言いましたよ。今度来たら入れるよと。私はこの言葉を二度と忘れないようにしておこうと思いました。

実は、この村を離れる3日前になったら、ニューギニアを訪れる研究者ならみんな知ってるんですが、いわゆるたかりという行為が見られました。私、実は寝袋を担いでこの村に入ったんですけども、おまえはこの寝袋をこの村に置いて帰るのか、それとも日本に持って帰るのか、こういうふうに見かねてくる男がいたんです。帰る2日前になりますと、おまえの時計が欲しいと。実は、その時計が欲しいと言った男は、私が調査をしている間、盛んに今何時かと聞いてきた男なんです。だから今から思えば、この男は時計が欲しかったんやなど。前日になりますと、日本で仕事をしたいから仕事を紹介してくれと、小学校で英語を教えている男が頼み込んできました。

それぞれの男たちに私は、こう言いました。「今度この村に来たら時計をあげるよ」、「今度来たら寝袋をあげるよ」、「今度来たら英語の仕事を紹介してあげるよ」。あからさまに断ると人間関係を遮断されます。

私、1度そういう目に遭ったことがあります。21歳のとき、今から30年前ですけども、パプアニューギニア大学の学生寮で3カ月ほど学生としてピジン語を勉強していたときのことです。そのときに、下の階にいた男子学生が、トランジスタラジオを日本から1台送ってくれと私に言うんです。それで、私は送り賃がばかにならない、だからそれは無理だと断ったんですね。そして、もう次の日から口をきいてくれなくなりました。もう一切私と視線を合わさなかったですね。彼らはよく要求をします。それは彼らにとって大変なプレッシャーでもあります。断られたときのことを考えるとショックだからです。例えば時計だったら時計を欲しそうな目をするんですね。くれないかなという感じの目をするんです。それは現地の習慣でアイギリスと言います。

ですから、本当に大事なものは天井裏に隠しておかないといけないうんですよ。それが欲しいと言われてあげなかったら人間関係を遮断されますから。だから大変そこところは気を遣います。ですから、「今度来たら」というのがやっぱりいいですよ。巧みに回避できます。

これは、ムームー料理のかなり終盤に近づいています。男が上から水を注いでいるところです。すると、下からふわっと一気に蒸し上がります。

真ん中にこういう筒でもって少し穴をあけておくんです。ここに水を注ぐわけです。これは蒸し上がってるところですね。こういうふうに煙が出ています。

これは食事が済んだ後になります。そして別の日にここでまたムームー料理をします。ですから、どこの村に行ってもこういうのがあります。これを見つけたら、ここで石蒸し焼き料理をしてるんだなと思っていただいたらいいかと思います。

それで、レジュメとはちょっと違ひまして、あと、「フィマ村を訪ねて」というA3のプリントがありますね。こちらのほうをご覧ください。ちょっとしたエッセーです。

114頁に線を引っ張っているところがございます。①というところをごらんください。「そのされこうべから1本の木が生え出して」と、こういうふうに表現がありますね。これ、ですから先ほど申し上げました死体化生型神話です。そして、②というのが右下、115頁の上の段のちょうど真ん中あたりにありますね。「ある者たちはバオバブの実とハトのかごのほかは全部とった」とか、それで「バオバブとハトが彼らの聖なるものになり、チンベヘスは食べることを禁じた。これが今のハト部族である」と。これは、いわゆるトーテム神話と呼ばれているものでして、ある部族のトーテム、つまり自分たちの祖先ですね、先祖をハトだとする部族はハトを食べません。自分たちの先祖は豚だとする部族は豚肉を食べません。自分たちの先祖はワニだとする部族はワニの肉を食べません。こうやって食料資源を保護することができるわけです。このトーテムという発想はアメリカのインディアンや、オーストラリアのアボリジニにもありますし、決して特異な考え方ではありません。ニューギニアは3万年の伝統があります。部族によって手をつけない

食べ物が少なくとも一つはあるわけです。そうやって人間と自然界との共存を可能にしていって
ということですね。

それから、115頁の下の段の食人神話、これに関しましてはほかの研究者がクールー病との関
連を報告しています。クールーというのはニューギニアの高地、フォレ族のフォレ語、在来の言
語フォレ語で震えるという意味があるんですが、この病気は、運動障害を引き起こして、発病者
の60%は成人女性、30%は子供であると。発病後1年で肺炎とか栄養失調で死んでしまう。過去
10年間に1,324例が記録されているということで、身内の死体を食べることによって脳のウイル
スが感染して発病するというんですね。これは、多くは儀礼とか習慣によっているんです。この
食人の習慣を欧米人が禁止するとこの病気は見られなくなったそうです。神話にも、「弟の死体が
いい味をしていることに気がついた。これが我々の人食いの始まりである」という食人神話があ
ります。

身内を食する内食人、そして敵を食する外食人と両方あるんですけど、部族間紛争で敵をやっ
つけたときに、自分たちの部族が勝ったぞということを誇示するために敵のされこうべを木に突
き刺し地面に立てておくという、そういった行為は過去にありました。

2年前に訪れましたフィマ村ですけれども、この村に滞在しているときにたくさん出た料理や
食材はサツマイモ、タロイモ、ヤムイモが挙げられます。それから、ライスですね。これは、現
地にトゥルカイという工場がありまして、そこで製品化しています。全国各地で販売しています。
それから、魚の缶詰もよく出ました。サバのみそ缶です。これがニューギニア人は大好きなん
です。結構塩分が含まれてますよね。これは、現地の人からしてみたら、私たちが思っているほど
安くないんです。白飯の上に缶詰の魚を上からぶっかけるだけの食事なんですけど、昔の日本人
もよく食べたと思います。これをたくさん持っていったら間違いなく喜ばれます。

それからヌードルも人気です。ちょっとしたインスタントラーメンがありまして、小さな袋に
入ったスープが中にありますが、これを使ってソースをつくるんです。そのつくったソースでも
って、野菜の上に、あるいは御飯の上にかけてたりして食べます。ここで塩分もしっかりとれます。
また、オーストラリアから食卓用の食塩とコショウが入ってまして、この村にもありました。
概して、この村では塩分の摂取量は少な目です。塩はみんなで分配されるべきものと捉えてます
ので、近隣の村と交換するときに塩はちゃんと調達できるんですけども、必ずこれは平等に分
配されます。

そして野菜、クムですね。キュウリ、タマネギ、ブロッコリーあたりはよく出ました。ポポー
は、果物のほうに入れたほうがいいでしょうか。果物としましてはバナナ、マンゴー、キーウイ、
アボカドを毎朝いただくことができました。フルーツコウモリというコウモリがいるんですよ。
このコウモリはマンゴーしか食べないんです。最初にその村へ行ったときは、何かおるなと思っ
て木の上を見上げたら、村びとは全然珍しくないみたいで、空を見上げてるのは私だけだったん
です。コウモリがいっぱいいるんですよ。ねぐらとして戻ってくるんですけども、フルーツコ

ウモリはおいしい果物しか食べないんです。

さっき言いましたように鶏はピジン語でカカルック (kakaruk) というんですけど、在来の言語からこの語彙は入っています。卵のことはキアウ (kiau) といいます。豚はピック (pik) です。村の人にとっては大事な食事です。

料理に関するピジン語表現をご覧ください。

例えば「塩とコショウを入れてください」、これはこう読みます。片仮名でちょっと書きましたけども、Putim sol na pepa. (プティム ソル ナ ペパ)、こんな言い方をします。プットというのは英語の put です。ソルというのは英語の salt です。ペパというのは英語の pepper です。英語の単語が8割ほどこの言語の中には入っています。プティムのイム (-im) というのは、ちょっと難しい文法用語でいうと他動詞をあらわす接尾辞なんです。日本語でいえば「コショウ」の「を」ってありますね、いわゆる「を格」といいますが、それに相当するものです。現地言葉では、他動詞をあらわすのにこういうふうに分けて表示するんです。

次に「タマネギを小さく切ってください」は、Katim anian liklik. (カッティム オニオン リクリック)、こういう言い方をします。片仮名をそのまま読んでいただいたら通じます。冒頭で紹介させていただいた85歳の男性も、戦時中こういった表現を使ったのかなというふうに思います。

それから、「ムームー料理つくってくれ」は、「メキム ムームー」と言います。これだけで結構です。ムームーと言えば、もう向こうの人はわかってくれます。

そして、「鶏の皮をはいでください」(Rausim skin bilong kakaruk.) このラオスィムというのは、実はドイツ語に由来します。ドイツ植民地行政政府時代にピジン語の中に入った語彙なんです。ですから、ほかにもドイツ語の語彙が4%ぐらい入ってます。英語が80%、残る15%ぐらいは在来の言語が入ってます。最後のkakaruk (カカルック) というのは在来の言語の語彙が入っています。skin (スキン) は英語です。

次の表現にまいります。Kaikai wantaim taro na kaukau 「タロイモとサツマイモを一緒に食べてください」という喉に詰まりそうな表現です。「カイカイ ウォンタイム タロナ カウカウ」と言います。kaikai (カイカイ) は、一番頭に残る単語かもしれません。カイカイといえばもうそれで食べ物してくれます。

村を歩いていますと自分の背丈よりも高いサトウキビがその辺になってるんですね。そのサトウキビよりも小型のピトピト呼ばれるサトウキビもいっぱい群生しています。村びとはサトウキビを下からカットして、こうやって噛んでジュースをのみます。上手にかむんですね。ニューギニア人っておもしろいのは、コーヒーを飲むときに砂糖を小さじに5杯ぐらい入れるんです。ふだんからサトウキビをこうやってかじってますから、もう砂糖を1杯とか2杯だったら苦いと言いますね。私も学生と一緒によくコーヒーを飲むんですけども、とにかくもう私が出会ったニューギニア人はみんな小さじ5杯分の砂糖を入れます。

もともとオーストラリア、クイーンズランドのサトウキビ農園の契約労働者として多くのメラ

ネシア人労働者が集められたんです。そこでメラネシアの言葉と英語を話す少数の白人の言葉とが接触して、こういうふうにまざったんですね。それをニューギニア人がニューギニアに持ち帰って、部族間の共通語としてこれは便利だということで広めていった言葉です。ですから、多言語社会にあってはこういう共通語というのは非常に大事なんです。この言葉は成立してからまだ1世紀とちょっとしかたってません。今、非常に言語学的に関心が高まっています。言葉はなぜ変化するのか、言葉の起源の問題であるとか言葉の獲得の問題だとか、非常に注目を浴びています。

右側の資料の4というところをごらんください。皆さん大分お疲れになってきたと思いますが、もうちょっとよろしいでしょうか。そこにヤマイモ、タロイモ、サツマイモという言葉が各言語で何と言うか記されています。マダガスカル語（ホヴァ語）は、アフリカの南東部で話されている言葉です。そしてタガログ語はフィリピン、ヤミ語は台湾の言語です。それからインドネシア語があって、パプアニューギニアの言葉が続きます。上の2つのトライ語とヒリモツ語、前者のトライ語は水木しげるさんと85歳の男性がいらっしゃったラバウルで話されている言葉です。ヒリモツ語、これはポートモレスビーの近辺で話されている言葉です。そしてフィジー語はフィジー共和国、パーミーズ語はバヌアツ共和国。昔、ニューヘブリディーズ諸島と呼んでいたところ。そしてクワイオ語はソロモン諸島で話されている言葉です。

ハワイ語、サモア語、タヒチ語、トンガ語、この4つはポリネシア文化圏で話されています。ニュージーランドのマオリ語もポリネシア文化圏に入ります。つまりポリネシアン・トライアングルといいまして、三角形が描けます。ハワイとニュージーランドとイースター島を結んでみて下さい。ラバ・ヌイ語は、モアイで有名なイースター島で話されている言葉でして、行政的には南米のチリ領になりますね。

まず、ヤマイモのところを見て下さい。各言語とも見事に語形が似てますね。一部違うものもあるんですけども、きわめて類似しています。マダガスカル語「ウビ」、タガログ語「ウビ」、ヤミ語「ウビ」、インドネシア語「ウビ」、広大な海洋世界、西から東にかけて、語彙が共通してるんです。タロイモもそうですし、サツマイモも語頭がk-で始まっているもの、あるいはk-が脱落したものというようにずっと並んでいます。これはもともと語頭にk-があったと考えます。

これはもう偶然の一致とは考えにくいわけです。いわゆるオーストロネシア人が広がっているわけです。オーストロというのは南という意味がありまして、ネシアというのは島々という意味があります。彼らは犬、豚、鶏といった家畜を一緒に連れてきました。あるときは太平洋を西に、またあるときは東に分散していったとされます。そして、バナナやココヤシといったような有用植物、それから、星の動きを見てカヌーを操る海洋民族であったという共通点があります。彼らの共通のふるさとは、学者によって見解は異なるんですけども、中国南部あたりを想定している人たちもいれば台湾を故地として考えている方もいらっしゃいますし、さらにニューギニアのメラネシア説を唱えている学者もいます。そういうふうに、学説としては3つほどあるんです。

それとは別に、線を引っ張った6つの言語の一つ、ヤガリア語、これは今回私がお世話になっ

た村で話されている言葉です。あとベナベナ語、ステスト語、ワルサ語、ダディビ語、マナンブ語は、私は接したことはありませんけれども、全部ニューギニアで話されている言語です。この6つの言語は今から3万年ぐらい前からいた人たちが話す言葉です。オーストロネシア系の人びとが今のニューギニアの沿岸部に到達したのが五、六千年前だと言われています。ですから、3万年の伝統があるニューギニアで五、六千年前といたら比較的最近移住してきた人たちであるということが言えます。ニューギニア島では1万年前の豚の骨が見つかっています。アジア大陸のどこかに共通のふるさとがあって、そこから犬や豚や鶏と一緒に移動してきたんですね。大陸とニューギニア島とが陸続きだったところに家畜と一緒に渡ってきているわけです。豚の骨が発見されたというのはそういうことです。

言語学では、残念ながら万年という単位が経過しますと祖語を再構することはできません。せいぜい五千年から六千年ぐらい前までです。

パプア系の人びとは、3万年の伝統を有するのですが、やっぱり過去に何度にもわたって移住と定住を繰り返した結果なんだろうと思います。ヤガリア語からマナンブ語まで全然語形が違うでしょう。隣の村へ行ったら全くの別世界が広がっているわけです。

非常におもしろいと思いますのは、「私のサツマイモ」と言うときに、所有をあらわす形態が接辞されます。サツマイモというのは他人に譲り渡すことができる所有物として位置づけられます。ほかにも、「私の犬」とか「私の鶏」だとか、何でもここへ入ってきますけれども、さっきのビルムというバッグもそうです。こういった他人に譲り渡すことのできる所有物に対しては、ka- と呼ばれる範疇詞をつけるんです。これを譲渡可能所有物と呼びます。ニューギニアのトライと呼ばれる言語では、ka- という範疇詞をサツマイモとか犬とかビルムという名詞の単語の前につけるんですよ。他人に譲渡することができない、譲り渡すことができないものとして、例えば「私のお母さん」とか、それから「私の指」とか「私の声」とかがあります。これは譲渡不可能所有物と呼ばれます。他人に譲渡することができないときは ka- という範疇詞がつかないんです。そういう区別をしております、日本語では「私のサツマイモ」も「私の母」も、どちらも表現上は違いがありません。つまり母という単語の前に何か異なる形態をくっつけるという習慣はもっていません。「サツマイモ」という名詞の前に ka- という範疇詞をつけるということをしません。何が譲渡可能かはその部族によって違うんです。

ですからおもしろいのが、「私の夫」とか「私の妻」には範疇詞と呼ばれるマーカーがついたりつかなかったりします。なぜか。将来離別する可能性があるからです。何がその部族にとって譲渡可能か、また譲渡不可能かというのは、その部族の世界観に基づいていると考えられます。ニューギニアは平等主義ですので、ちょっとでも平等性が崩れていると感じられたとき、彼らは非常に不満をもちます。

例えば、英語教育がニューギニアでも盛んですが、国民の20%しか英語を話しません。そこで情報共有に差が生じ、得をしているのは英語が話せる人たちだけだと考えるんです。そんなのは

不公平だということで、例えばコンサートなんかするでしょう。そうすると最初、在来の言語とかピジンと呼ばれる言語で歌を歌うときはみんなおとなしく聞いているんですよ。でも途中で英語の歌になると、ホワイトマンの歌はやめろという大声があちこちから飛んでくる。1975年に独立はしましたけれども、長い間オーストラリアの植民地でした。ここまでで何かご質問がありましたらどうぞお願いします。

○清田 どうも、岡村先生、ありがとうございます。

大変おもしろく私はお伺いしました。割合興奮もしました。というのは、私もフィリピンのマニラというところへ3年ぐらい駐在してまして、当時はちょうどアキノさんという女性の大統領が登場した前後でクーデター騒ぎがしょっちゅうあったんですけど、余りニュースを東京に送っても大きく載らないのでよくあちこちの島をめぐって歩いてたり、それから高地に出かけて、今、岡村先生からご紹介いただいた高地人、フィリピンにもたくさんいるんですけど、マギング族とか台湾の高砂族とちょっと親類みたいな、背が低くて非常に人懐っこい、若干外来者に対してはおびえたような目つきで迎えてくれるような人たちともおつき合いして、ああ懐かしいな、共通する部分がたくさんあるなというようにして、さっきから興奮して聞いてました。

脱線しますと、昨今は「今でしょ」という言葉はやってますよね、日本でね。さっき岡村先生が、時計が欲しいと言われたりなんかしたときに、また次ねとおっしゃったんですけど、次にフィールド調査に先生が入られるまでに今でしょという言葉が向こうに入っちゃうと、多分フィールド調査できなくなるんじゃないかなと私はちょっと心配してお伺いしてました。

皆さん、どうしますか。せっかくまだ3ページ、4ページの部分があって、そこをぜひお伺いしたいと思うんですけども、どちらがよろしいでしょうか。ちょっと閑話休題が入りましたので、3、4ページもう少しお話しいただいてから質問をということではいかがでしょうか、よろしいでしょうか。(拍手)

○岡村 今回私は、言葉の資料を収集するのに協力をしてくださった村人20名の名前、年齢、性別、母語、職業、学歴、母語以外に話せる言葉、そして丁寧な表現を誰が相手だったら使いますかということを知りて回りました。調査に協力してくれた人たちの氏名がここにずらっと並んでいます。一番最初の方だけ見ますと、ヨウェさんという女性がいます。年齢は20歳から24歳。余り年齢を聞いても知らないと言う人が結構いらっしゃいます。ちなみに、「あなたはおいくつですか?」は Yu gat hamasu krismas? 「ユ ガット ハマス クリスマス」(あなたは何回クリスマスを迎えましたか?)と表現します。彼女は、フィマ村に生まれ、ヤガリア語を母語とします。職業は農業。学歴は小学校卒です。高校を卒業したといたらもう非常に学歴の高い人というふうに見られます。ヤガリア語以外にピジン語を話します。丁寧な表現は、学校の先生だったら使うと答えています。この表はそういう見方をします。

それから表の縦の軸に話し手の名前が載ってます。カッセンという人から始まって、スケ、アイバン、アリコ、アマロ、アスリム、サイモン、デルカ、ヤリフォ、ずっと下りましてドカスに

至るまで20名分あると思います。太字は女性です。横軸は話し相手、話し相手が教師、旅行者、日本人旅行者（オーストラリア人旅行者）、そして近隣の村人、ソマレさん（パプアニューギニアの首相を3回務めた）です。ソマレさんは、余談ですが、戦時中、日本軍に日本語を教えてもらっています。日本軍が開設した学校で日本語、日本の地理や歴史、挨拶の仕方、エチケット、そういうものを学んでいます。日本にも何度か来てます。大の親日家です。

ビッグマンというのは、それぞれの村にいる政治的なリーダーのことです。ビッグマンを頂点とする平等社会がそれぞれの村にあります。ビッグマンをどうやって決めるかといいますと、政治的なリーダーなんですけども、他人にどれだけ気前よく振る舞うことができるか。例えばクリスマスプレゼントをたくさん持って帰る男ってすごいんですよ。また話し上手、交渉がうまい人でなければなりません。世襲制ではないんです。ですから、力のある男が自然に選ばれます。

そして弟妹、祖父母、父母、兄姉という形で横軸の話し相手が並んでいます。

左上にピジン語の表現がありますね。ちょっとごらんください。1番から5番まで表現があります。これ全部、「サツマイモと鶏肉を一緒に召し上がりませんか」という依頼表現なんです。意味は2ページが一番下のところに書いてます。一番最初にある例文が一番相手への配慮を欠く表現です。配慮がないというところまてはいかないんですけども、それほど丁寧さはないと。例文2は、文頭に plis ‘プリス’ とあるでしょう、それがついてるので例文1より丁寧になります。例文3は、inap ‘イナップ’ が使われています。これは英語の助動詞でいえば can に相当するんですが、助動詞がついてるので例文1や2よりも丁寧になります。例文4は疑問文の形式になっているので、相手がイエスかノーか答える余裕があるんですね。そういう表現の仕方になっているので、例文4は例文1、2、3より丁寧であると。例文5は、Inap yu (= Can you) にプリスがついてるので、この中では最も丁寧な表現になります。「この最も丁寧な表現を話し相手はどういう人であったら使いますか」ということを尋ねて回ったのです。

ポイントは2つありまして、一つは男性と女性ということで見ますと、太字が女性なんですけど、男性は上の5名、カッセンから始まってスケ、アイバン、アリコ、アマロに至るまでの5名ですが、話し相手がビッグマンのときに丁寧な表現を使うと答えた人は、その表の左側の人物に対しては決まって丁寧な表現を使っています。そういう意味において非常に一貫性があるんですね。そして女性陣のほうを見ますと、真ん中から上のほうにデルカ、そしてヤリフォ、少し下のほうにさがってアポ、エスタ、ベティ、ヨウェ、レイチェル、ドカス、これらを見ますと X の出現に全然一貫性がないんです。問題は、なぜ男性のほうが女性よりも多種多様な表現を習得しているかということなんです。

それは、一つには、近隣の村人と交易をします。そのときに、交易がうまくいくかいかないかというのは男たちの手腕にかかっているんですね。そのときの交渉で、塩を交換する、俺のところからは塩と鶏肉、卵をおまえのところにする。おまえのところの村は何をくれるんだという、そういう交渉をするわけですね。その交渉がうまくいくかいかないかは全部男たちにかかっている

んです。男の仕事なんですね。その交渉をうまく行うために多種多様な言語戦術をやっぴり持つておくべきと考えるのです。女性のほうは、そういったプレッシャーが全くないんです。女性のほうは隣村と交易するときにそういったプレッシャーはないものですから、話し相手が誰であってもこの村は平等だということで、男性におけるほど表現を発達させていないんじゃないかというふうに考えました。

そして、もう一つ気がつくことがあります。こちらのほうが、要因としてはおもしろいんですけども、一番下のレイチェルさんとドカスさん、このお二人、女性なんですけど、話し相手が誰であっても丁寧な表現を使わないんです。それは学歴が関係しているようなんです、高等学校を卒業していますからね。確かにレイチェルさんとドカスさんのところを見ますと、年齢が25歳から29歳、女性、ゴロカで生まれてヤガリア語を話し、高卒です。ピジン語と英語を話し、誰に対しても丁寧な表現は使わないと言い切っています。もう一人のレイチェルさんも、下から5番目ですね。やっぱり25歳から29歳の女性で、ニューアイルランド島といってちょっと離島から来られた方です。職業は教師です。自分は丁寧な言葉を使われる存在だと思っているんでしょうね。そして高等学校も卒業してるんだということで、レイチェルさんは誰に対しても、英語とピジン語をしゃべるけれども、丁寧な表現は余りしないと答えている。

たまたまこの表一覧を作成しますと、学歴という社会的属性が関係しているかなと考えられるわけです。男と女とで分布が異なる点も興味深いです。

日本人はどういう位置づけかといいますと、3ページの上のほうにありますが、こちらにグループAとグループBと便宜上2つに分けましたけれども、グループAのほうには教師であったりオーストラリア人観光客であったり日本人観光客、近隣の村人、ビッグマン、ソマレ元首相というふうにありますね。こういった人たちに対しては丁寧な表現を使うと答えた人が全般的に見るとやっぱり多いんです。右側のほうは、つまり内側の世界の人に対しては余り使わないということが見てとれるわけです。

ですから、日本人観光客というのはやっぱりビッグマンとか近隣の村人とかそういったグループに入ります。彼らはワントク（同胞）という概念がありまして、相手が同胞か否かというところで分けるようなところがあります。このワントクというのは非常に強い結びつきがあって、また、先ほども申し上げましたが緊張関係も有していて、ワントクから自分自身が外れてしまうと新たに村を形成して、また新しいワントク集団をつくらないといけないんですね。ピジン語を使うことによって、同じ言葉を話す同胞、つまりワントクとして見られるんです。

ですから、身内は近接的といいますか、グループAの人たちというのは近接性ということを考えるとちょっとマイナスの意味合いを有しているということは言えます。

日本人やオーストラリア人観光客というのは近隣の村人であったりビッグマン、それから教師、そういった存在と同列に扱われる。つまり、ワントクではないという意味において同列の関係にあります。

また、ことばの男女差というのは確かにありまして、村びとは、ピジン語はみんな一緒だというんですけど、でも少なくとも今回の調査では、男女の言語行動というのはやっぱり違いがありそうだとということがわかります。

それから、女性のほうでそういうふうな男性と違う言語行動が見られるのは、交易が主に男性の仕事であることが関係していると述べました。ですから、女性のほうに依頼表現の選択に予測されたほどのバラエティーがないんじゃないかと指摘させてもらいました。

本日の話に関しましては参考文献のところに挙げさせてもらいましたが、私の2013年の「フィマ村を訪ねて」という、これは本学が発行している『こだはら』という雑誌に掲載されています。こちらのほう、もしお時間がありましたら、目を通していただければというふうに思います。

それからもう一つ、今回お話ししました相手に対する配慮の問題ですけど、これは人類に普遍的な現象として、アフリカ人であろうがアジア人であろうが、南米人であろうがニューギニア人であろうが、相手に対する配慮というのはどの地域、国の人も持っているわけですが、そのことについてちょっとした論文も書きました。それは、『オーストラリア研究』というジャーナルがありまして、その第26号、そちらのほうに掲載をさせてもらいましたので、もしご興味がありましたらご覧下さい。

本日は本当にありがとうございました。(拍手)

○清田 どうもありがとうございました。

最初はどちらかというと文化人類学的なアプローチから、なじみやすいところから入っていたいて、最後は専門の言語学ということで締めていただいたと思うんですけども、せっかくの機会ですので、何でもよろしいのでお伺いしたいことございますか。

私から、じゃちょっとお伺いして、1つだけ、フィリピンの高地人の村なんかを訪れるとマラリアが結構しょうけつというか、マラリアが非常に、二十数年前の話ですけど、この地ではいかがなんでしょうか。

○岡村 私が行ったフィマの村ですけども、高地なんですね。マラリアは標高の高いところはないんです。ですから、マラリアの錠剤は一切もらっていきませんでした。沿岸部のほう、低地のほうで長いこといらっしゃる方は、やっぱりマラリアの錠剤を服用しないとだめですね。私学生時代は、オーストラリアの病院に行きまして、ニューギニアに入る1週間前から、1週間に1回だけですけどもマラリアの錠剤を飲み、入島している間はずっと飲みました。日本に帰国してからもさらに一、二週間は飲んでくれと言われてまして、それを実行しました。ただし、1年とか2年の長期にわたってその薬を飲みますと肝臓をやられるんですね。ですから、JICAの人なんかは肝臓をやられるか、マラリアにかかるか、どっちか選択しろと言われるそうです。

いろんな研究もなされていて、蚊は白い靴下を嫌うとか、私本当かどうかわかりませんが、ソロモン諸島の国立の研究所がそういうことを発表していたみたいで、いつもはいていくんですけど。夕方の時間帯、蚊はくるぶしのところを刺すんですよ。だからちょっと気をつけないとい

けないんですが、大学生でも教室の後ろのほうで暑いのにぶるぶる震えている学生がいます。マラリアに感染してるんですよ。薬局に行きますと普通に錠剤を売っています。暑いのに、沿岸部に暮らしてる方々は、ビーチに行ってやっぱり、上から毛布みたいなのをかぶってぶるぶる震えてる。発作がおさまるのを待ってるんですね。私の知人でも、立教大学で人類学をやってる男がいるのですが、彼もマラリアになりました。また民博にいらっしゃった方で、最後は多臓器不全でお亡くなりになりましたけれども、彼もマラリアにかかりました。私も気をつけてはいます。

○清田 ありがとうございます。

何か、はい。

○会場 どうもありがとうございました。

本日のテーマの食料ということからちょっと外れるかもわかりませんが、何でもということなんでお言葉に甘えて、教育のことなんですけれども、大学が6つあるということをご説明いただいたんですけれども、今回の調査を見てたら、小卒とか高卒で、高卒で先生になってられるということなんで、かなり高卒の方も社会の中ではエリート意識、エリート層なんかという感じがするんですけれども、そうしますと大学というのはどういう方々が行かれるのか。先ほど、かなり専門的な分野の大学がそれぞれ6つ、特徴がございますけれども、やっぱり都市に住んでいられる方が中心に行かれるんでしょうか。全体の人口の何割ぐらいの方が大学へ行かれるのか、ちょっと教えていただければと思います。

○岡村 6つある大学のことをご質問いただきました。まず学びそのものが大きく6つにすみ分けされてますよね。その大学じゃないと学べない学部があって、非常に日本と違うなと思いました。日本の大学の文学部だったらその辺の大学にあってすみわけができていない。

今のご質問ですけれども、必ずしも都市部に居住している人だけが大学に行くということではなくて、それぞれの地方、地域でも村の中で優秀な人材は、やっぱり奨学金をもらって都市の大学のほうに行くようになってます。大体2割ですね。大学で学位をとるニューギニア人はめったにいないと思ってください。人口は600万人あるんですけども、ただ、人口に関しましてものすごくいいかげんなところがありまして、ここから先、村が幾つある、じゃ大体このくらい人数がいるだろうというカウントの仕方をするので、600万人という公式発表はあるんですけども、どこまで信用していいものやらというのはあるんですね。

ただ、人口がお芋さんのおかげで、やっぱりお芋さんの畑がある周りは必ず村がいっぱいあるんですよ。どんどん人口がふえていってることは間違いないんです。奨学金を使って2割の人が大学に進学する。そして、大学院となるともっと少なくなるんですが、大抵オーストラリアの、あるいはニュージーランドの大学院のほうに進学して、オーストラリア的な、欧米的な価値観を植えつけられてニューギニアに戻ってきます。

最近喜ばしいのは、以前は大学の教師、教壇に立ってるのは英語を話せるイギリス人、アフリカ人だったんですけども、最近はニューギニア人の中からそういった教員が育ってきて、大変喜

ばしいことだなというふうに思っています。その2割の人は英語をしゃべり、パソコンを操ります。

今この国で一番大きな問題になってるのはエイズなんですが、一夫多妻制でしょう。ご主人がエイズになったら奥さんはみんなエイズになるわけですよ。どんどん広がってるんですよ。エイズの知識とか情報、教育は英語でしか受けられなかったんです。地方の人たちというのはどうしてもそういった情報を入手できなくて、今申しあげました2割の人しかやっぱりそういった情報を共有できないという非常に大きな問題点があります。だから、今、近隣諸国の協力を得てエイズ問題、国家をあげて解決を目指してるんですけど、なかなかうまくいかないという状況もあります。

○清田 いかがですか。

○岡村 ついでに、日本に留学する人は毎年5人。今、大阪大学に1人います。日本政府の5人の枠に300人が応募します。日本にどんどん来てほしいんです。私はその人たちをつかまえて調査をすることもあります。あと JICA の研修生がいます。

○会場 どうもありがとうございました。

○清田 ほかにいかがですか。

私、もう一個だけ質問させていただいていいですか。

一つだけ、すみません。先ほどの先生のお話の中で、ヤムイモのところでマダガスカル語が非常に近いですよ。マダガスカルというのはたしかアフリカの南東岸で、あの辺までインドネシア系の方たちが遠洋航海で行ったというふうに言われてますけれども、インドネシアやパプアニューギニアのあたりからインド洋、それからアフリカ東岸、このあたりにかけてほかにもマレー系の言葉が類似していて、その痕跡も含めて認められるような地域というのはございますんですか。

○岡村 オーストロネシア系の言語で言えば、表中にあるフィリピンの諸言語が話されている地域が該当します。これは19世紀の比較言語学という学問で、言語学の音韻対応という科学的な手法を用いて系統関係を証明しています。

○清田 せっかく食がメインテーマなんで、食べ物について何かご質問ございませんか。何か、なかなか塩分が日本人より半分で健康的な暮らしをしているようですけれども、何か食に関してご質問ありますか。

○会場 塩分と、食のことは関係ないんですけど、昨年、ほかの講座で、南アメリカ、南米やら北米やらの原住民がベーリング海峡を渡ってきたん違うんやと、あっちのほうにアフリカみたいな人種が発生したんやとか、それから、さっきの太平洋のほうから渡ってきたんやとかいうことをおっしゃった先生があるんですが、先生はそれについてのお考えがありましたら。

○岡村 オーストロネシア人の移動に関しましては先ほど申しあげました中国南部、雲南省あたりを考えてらっしゃる方もいますね。台湾とかニューギニア、メラネシア、その辺がオーストロネシア系の民族に関しましてはそう言われてます。ただ、パプア系の3万年という伝統を有して

る彼らの話になりますと、ちょっとやっぱり言語学の手法では限界がありまして、あとは考古学のお世話にならないといけないんですが、特に炭素性年代と言って物質の古さを測定する方法がありますが、それであるとか、先ほどちょっと所長ともお話をしてたんですが、最近ではDNA鑑定というのがありますので、より確かな学説に近づいていくのはまだまだこれからかなというふうに思っております。

○清田　じゃ、よろしいでしょうか。

じゃ、改めて先生にもう一度拍手でお礼を申し上げたいと思います。(拍手)

○岡村　どうもありがとうございました。

○司会　岡村先生、ありがとうございました。では、すみません、4時を過ぎておりますが、第2回目の国際理解公開講座、これで終わらせていただきます。本日もありがとうございました。

本稿は2013年度帝塚山学院大学・(財)大阪狭山市文化振興事業団主催国際理解公開講座(前期)「食は世界を結ぶ・各地のグルメ、その文化と風土」における講演をまとめたものである。